

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 花き

発行日 平成24年 9月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどうの病害虫防除の徹底と、翌年に向けた収穫後管理を行いましょ
- ◆ 小ぎくの健全な親株を確保しましょ

りんどう

1 生育概況

今年の彼岸需要期は概ね順調に出荷されましたが、高温の影響で地域や品種によって開花遅れや障害花の発生がみられました。病害虫ではハダニ類が多いほか、リンドウホソハマキは昨年より少ないものの発生が続いています。その他、オオタバコガ、黒斑病の被害がみられています。

2 病害虫防除

(1) 葉枯病

秋季にも降雨により拡大する可能性があるため、株養成ほ場の防除を継続します。

(2) 褐斑病

発生は少ない傾向です。発生のみられるほ場では、有効な薬剤を散布するほか、被害茎葉を圃場外に持ち出して処分します。

(3) 花腐菌核病

高温の影響により子実体(きのこ)の形成は遅れています。花腐菌核病は花卉から感染します。10月以降に蕾から花卉が見えている品種は花蕾部への防除が必要です。降雨が続く場合は散布間隔を短くし防除します。発病がみられた場合は、菌核ができる前に被害茎を圃場外に持ち出して処分します。

(4) リンドウホソハマキ

昨年に比べ発生は少ない傾向ですが、茎への侵入による被害の発生がみられています。また、定植一年目のほ場でも被害が発生しています。発生のみられるほ場では、残茎葉の折り取りを確実にし、ほ場外で確実に処分します。

(5) ハダニ類

高温乾燥のため、発生が依然として多い傾向です。発生のみられるほ場では、薬剤散布による防除を継続します。

(6) アブラムシ類・アザミウマ類

開花中～開花後に特に増加します。これらの害虫は、ウイルス病を媒介する恐れがあることから、収穫後の残花部分は確実に折り取り発生を抑えます。極晩生種でも発生が広がるため薬剤散布に努めます。



定植年のリンドウホソハマキ被害

3 収穫後の管理

- (1) 収穫後の圃場は病害虫防除がおろそかになりがちで、病害虫が多発しやすくなります。翌年の発生原因ともなるので、収穫後も防除を継続してください。
- (2) 収穫後は花の着いた茎の部分を折り取り病害虫防除と株養成を促します。定植年の株でも開花しますので、花はできるだけ摘み取ってください。

- (3) 茎葉の折り取りや刈払いは、ウイルス病などの感染を防ぐため茎葉が完全に枯れてから行います。晩生種や極晩生種は枯れる時期が遅くなりますが、無理な折り取りで株を傷めることがあるので、その場合は春に折り取るようにします。
- (4) 翌春の雑草対策のため、秋のうちから圃場内外の雑草対策を行うことが効果的です。

小ぎく

1 生育概況

9月咲き品種は高温乾燥により開花の遅れや草姿の乱れ、花蕾の奇形などが発生しました。病害虫では、ハダニ類やアザミウマ類などが依然として多くみられています。また、9月以降、オオタバコガの発生も増え、10月咲き品種への被害もみられています。

2 病害虫防除

(1) 白さび病

発生は少ない傾向ですが、品種によって上位葉まで発生がみられます。今後、気温が下がり、雨が多くなると白さび病の感染が多くなります。特に、親株に伝搬しないように注意してください。

(2) ハダニ類

9月以降も降雨が少なく乾燥した状態が続いたため、ハダニ類の発生が依然多くみられます。これから収穫になる圃場のほか、翌年の親株用に養成している株にも防除を継続します。薬剤散布は葉裏へ十分薬剤が付着するように行います。

(3) 上記の病害虫の他、アブラムシ類、アザミウマ類、オオタバコガの発生も続いていますので、防除を継続します。

3 親株管理

(1) 栽培計画

翌年の栽培に向け、各品種の開花期や特性を整理します。そのうえで品種構成や作付面積を決定し、必要な親株の数量を確保します。

(2) 親株選抜

翌年採穂用の親株は、収穫前の選抜を徹底します。開花期が狙う時期に合っていること、草丈がよく伸び、本来の品種特性を備え揃っていること、葉の枯れ上がりが少ないこと、病害虫に侵されていないこと等を確認して優良な株を選抜します。

(3) 親株管理

翌年採穂用に選抜した親株には、収穫後、マルチを剥ぎ順次土寄せ、追肥を行って株養成します。茎が伸びてきたら適宜台刈りを行い、伸びすぎないように管理します。

親株のハウスへの伏せ込みは10月下旬～11月上旬頃までに行い、早めに活着させるよう管理します。伏せ込みは、品種や株の充実状態等により適する方法が異なり、また病害虫の持ち込み程度も異なるので、適した方法で作業を進めてください。

ア 親株の伏せ込み

冬至芽の発生の少ない品種に適し、作業の手間も少なく済みますが、白さび病などの病害を持ち込むことが非常に多くなるので、薬剤散布に注意が必要となります。

イ かき芽利用

冬至芽の発生の遅い品種、少ない品種に有効ですが、病害を持ち込みやすく、株での伏せ込みより手間がかかります。

ウ 冬至芽利用

揃いが良くなり病気の持ち込みが少なくなりますが、伏せ込み作業に労力がかかり、冬至芽の発生が少ない品種には利用できません。品種の特性を十分に理解して、それぞれに適した増殖方法を選択してください。

ストック

1 定植後の管理

(1) かん水

蕾が見える頃までは十分にかん水し、草丈を確保します。発蕾後のかん水量が多いと花穂部の徒長や茎の軟弱化を招くので、かん水を徐々に控えます。

(2) 温度管理

できるだけ涼しい温度で管理することを心がけます。霜が降りる頃まではハウスを開放しておきます。強風等によりハウスを閉める場合は循環扇等を利用して空気を対流させ、徒長や菌核病の発生を防ぐよう努めてください。

(3) 追肥

生育に応じて速効性の肥料を施しますが、草姿の悪化を防ぐため発蕾までに終えます。

2 コナガ防除

(1) 生育中の薬剤防除は、抵抗性獲得を避けるため異なる系統の剤のローテーションでの使用を徹底します。

(2) またハウスの開口部を防虫ネット（目合いが1mm以下のもの）でふさぐことも効果的です。この場合通気性が悪くなり品質低下の原因となる場合があるので、風通しの悪い場所では注意が必要です。

農作物技術情報第8号は10月25日（木）発行の予定です。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間
農作業 笑顔の豊作 無事故から

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。